

「今、私の晴雨計は！⁽⁵²⁾」

「すじいトシヨリと」

一流の老人」補遺

平山征夫

「老人本市場」の話は前回で終りにしようと思っただが、いくつか私の体験話も含めて心残りの話が残ったので、それらを集めて補遺として書いてみた。と言ってもそれほど話はない。

老人の生き方の薦めで、山崎さんと池内さんで全く異なったのが同窓会などへの出席の是非だ。山崎さんは、同じ出身で多くの思い出を共有した同士が老人になって集う時には、懐かしいという良い感情になれる機会であり、健康や病氣、などの有益な情報に出

会う場でもあるからとお勧めだ。

一方池内さんは、年配者は話をねつ造するので、その話には「そうであった」に「そうであつて欲しかった」という話が混じってくるので、そもそも年寄りの会は勧めない。組織で生きてきて退職後も群れたがるのは、自立できていない証拠、一人一人が自分の過去を背負い、老いを迎えるのが老いの迎え方だ、という。同窓会の幹事などやっているのはもつての外ということになる。

池内さんの「老化早見表」には老化の程度を示す現象が三段階に整理され、自分の症状から老化状態が即わかるという。例えば「失名症」が「失語症」へ、話の「横取り症」が「ベラベラ症」に発展

するほか、ねつ造についても「過去すり替え症」が「過去捏造症」「記憶脱落症」へ発展、いずれも第一から第二段階への進展、そして第三段階の「忘却忘却症」になるという。少し思い当るところがあった。

池内さんお薦めの中でも一つ「え！」と思っただことがある。それは退職後の夫婦旅行のこと。それを願っている夫は多いが、妻の方は友達と行く方が良く思っているという。夫婦旅行は基本的に家庭が移動しているだけなので話題が乏しい。だから目的の旅館に夕方何時頃に入るかだけを決めて夫婦別々に出発、ルートも別にすれば夕食時の話題は豊富になるし、旅自体が新鮮

になるというのだ。夫婦は歳と共に寄り添い助け合うのかと思ったら、それぞれが自立して生きるというのだ。池内方式からすれば全然自立できていないが、読んでいて内心「悪くないかも」という気もしてきた。一度実践してみるか？

ついでに池内さんの「老人深海魚」説に触れよう。歳月も深い海に似て長生きすると過去の重荷で体が曲がったり、顔がゆがんだりするというのが。その話を含む講演の後池内さんに挨拶に来た女性は学生時代の「マドンナ」だった。かつての憧れのひとが「私、覚えていない？」「老けたでしょう。もう鏡見るのがイヤなの」と本人が言うように面影は一切な

かった時、「歳月っていうのは、きついことをするな」と思ったそうだ。同じような経験は大抵している。私は少し違う経験をしている。同じくマドンナだった同級生に、男友達が「綺麗に歳を取ったね」というのに「若い時の面影は残っていないけど・・・」と言った積りで「見る影はないけれど」と言ってしまった。当然大いなる響壁を買ったが、これも失語症のせいだろうか。面影と見る影では違いが大きいので要注意。

ここからの話は少し品がなくなることをお断りしておく。池内さんは著書で「シモ」の問題に触れオムツの薦めを書いていることは前回触れた。池内さんはシモの問題を目や歯と違い隠し事に

して悩んでいる人が多いことについて、「永年使ってきたのだから故障するのも当然、その際は労わってあげるべき。僕はお世話になつてきたのだからとお思い、シモとかではなく名前をちゃんと付けていきます。アントンというのがしっくりしたのでそう呼んでいます。また行くの！アントン、っていう具合に対話しながら用を足すのです。今日のアントンは何か元気がないな、などと言ったりもします。アントンの経歴書も書いてみました。若い時は元気だけれど年を取ると元気でなくなる。元気な時は「張り切り大王」「モリモリ先生」「頑張り屋さん」「放蕩息子」、それが現在では「しょんぼりくん」「うなだれの君」「退

役軍人」「オチビさん」なんて言われたりしている。シモをちゃんと格上げして一人前に扱ってやるのがいい」と書いている。その後には「教え子の女の子がオーストリア人と結婚して、日本に來ると夫婦で逢いに來るのですが、その建築家の旦那さんの名前がアントンっていうのです」。

池内さんが「オチビさん」と呼んでいるというのを讀んで、ある日の母親との会話を思い出した。知事時代の途中から実家の近所の病院の介護病棟にまず親父が、それから暫くしてお袋が入院した。いずれも背骨の一部が潰れて歩行が不自由になったためだ。「夫婦部屋ですとお母さんがどうしてもお父さんの世話をされ

ますので、別々にしました」という医師の配慮で両親は隣同士の入院生活を送った。週末時折覗きにゆくと「デート」と称してお袋が親父の部屋に出掛けてお茶を一緒にする。老夫婦にとって最後の至福の時間だったろう。そんなある時、デートの途中親父が部屋の簡易トイレで用を足そうとした。中々引っ張り出せずに苦闘しているのを眺めて、お袋が「ほんと、小ぢやなつた」と言った。実感が籠っていた。私は思わず「お袋、何ということを言うんだ。男のプライドを傷つける発言だぞ」と反論、それにまた「だってそうなんだから」とお袋。私も負けじと「比較はお袋しか出来ないが、自分だってそんな役にも立たないでっ

かいおっぱいをぶら下げて腰が痛いなど言ってるじゃないか」と

さわしい名前かも・・・」と思いそれに決めた。

再反論。するとそれに対するお袋

(平成30年10月2日)

の反撃は凄かった。「そのおっぱいを専ら吸ったのは誰だと思っ

ているんだ」ときた。「親父より

多かったかは俺は知らん…」。と

私。ふと見ると、こんな二人のや

り取りを便器に座って親父はニ

ニコ聴いていた。その好々爺振

りに「親父もいい顔になったなあ」と思った。

と

池内さんを見習って私も名前

をつけて呼ぶことにした。アント

ンに負けない良い名前をと思案

していると、ヘルシンキの大聖堂

の前の土産屋さんで買った「ムー

ミン」が机の上で笑っていた。

「うん！ムーミンなんか私にふ

